

井上地区案内マップ

“いのうえ”の寺社や歴史文化遺産をめぐる
いのうえスタンプラリー



スタンプラリーモデルコース

Aコース【寺社巡り】

距離 約3.6km 約1時間30分

- 井上コミュニティプラザ前 → ⑥ 医師神社の縁起伝説 → ⑨ 性光寺蓮如肖像画 → ⑬ 住吉神社の縁起伝説 → ⑯ 中橋区正八幡神社の石造遺物 → ⑲ 五反田区八幡神社 → ⑳ 中須加区八幡神社 → ㉔ 普念寺旧跡地 → 井上コミュニティプラザ前

Bコース【歴史文化遺産巡り】

距離 約3.2km 約1時間30分

- 井上コミュニティプラザ前 → ② 洞庭善兵衛碑 → ③ 真田吉左衛門碑 → ④ 真田蓮成居士碑 → ⑭ 洞庭善教居士碑 → ⑦ 川尻区のパンモチ石 → ⑧ 洞庭朝休碑 → ⑩ 七地藏尊 → ⑪ 共同浴場跡 → ⑫ ヨーバ跡 → ⑮ 中橋久左衛門屋敷伝承地 → ⑰ 中橋区のパンモチ石 → ⑱ 中橋遺跡 → ㉑ 五反田石標 → ㉒ 五反田区のパンモチ石 → ① 井上の荘の団地名 → 井上コミュニティプラザ前

企画・編集 井上の郷土文化を考える会

TEL.076(289)2436 井上公民館内

石川県津幡町

(2014年10月発行)



医師神社の縁起伝説



川尻村の徳右衛門が田起こし中、鉾先に木コロがあたり、そこから血がでてのを見て、畏れ驚き木コロを自宅へ持ち帰りました。その後、毎日お参りしていたところ家族の病気が治ったという。徳右衛門は霊験あらたかなことから、村の真ん中に小さな御堂を建て木コロを安置しました。当時、集落に疫病が流行しており、村人たちが朝夕お参りしたところたちまち治まったといわれます。その後、神様として崇拜することになり、病氣平癒に効験があることから、社号を医師神社としたものです。

性光寺蓮如肖像画



性光寺に所蔵する「蓮如上人肖像画」は、軸装仕立てで本堂右の厨子に収められています。「加越能寺社由来」下巻に、「性光寺の開基は宗全、創立は文明6(1474)年、什宝物は宗祖大師真影一幅の他、十二幅の仏画像」が記載されています。そのなかに「蓮如法主寿像真筆」の記述があり、当肖像画であると考えられます。上人像は墨染めの法衣に袈裟をつけ、顔立ちは柔和でふくらとしており、両手に念珠をつまみ左向きに上畳に座って描かれています。

住吉神社の縁起伝説



住吉神社の祭神は庄村の住吉神が津幡川を燕の葉に乗って川尻村へ流れてきたと伝えられています。村では庄村へ送り届けたが、しばらくするとまた漂着し、「クロベイブチ」(現在地)に落ち着かれることになったといわれます。住吉の神様は、海上航海の神ともいわれます。川尻村は河北潟や津幡川の水運や漁業に深く関わってきた集落でありましたので、勧請神としてふさわしい神様であるといえます。昭和初期頃まで、毎年3月8日に「燕まつり」が行われていました。

中橋区正八幡神社の石造遺物



正八幡神社の社殿に石仏と五輪塔の石造遺物が安置されています。石仏は砂岩製の自然石に半肉彫りの如来坐像が彫刻してあります。一方、五輪塔は地・水・火・風・空輪からなり、宇宙の生成要素を表現したとされますが、ここに残存するのは水輪部と火輪部の残欠です。これらは室町時代、当地域に有力者が居住していたことを示す貴重な宗教遺品です。

妙楽寺旧跡地



妙楽寺は、明治期前半まで当地に寺を構えていましたが、現在は加賀爪地内に移転しています。「河北郡誌」に「開基は西信と言ひ、俗名は西島九郎右衛門なり。文明5年(1473)9月、蓮如の北国に下向するや、その弟子となり、法名並びに自筆の名号を賜う。(後略)。「津幡町史」には「本山『申物帳』に正徳2年(1712)、親鸞聖人御影像と寺号を授けらる」とありますから、江戸時代中期に道場から寺院に昇格したことがわかります。

五反田区八幡神社



当八幡神社は五反田集落と中須加集落を結ぶ道路沿いに南面して建てられています。正面2間、側面4間の切妻造り、平入り、照屋根流れ造りの小さな社ですが、本殿、幣殿、拜殿が整えられています。天正15年(1587)、小浜神社境内より当地へ移転造営したとされます。「津幡町史」には「本山『申物帳』に正徳2年(1712)、親鸞聖人御影像と寺号を授けらる」とありますから、江戸時代中期に道場から寺院に昇格したことがわかります。

中須加区八幡神社



当八幡神社は集落口に鎮座し、南面して建てられています。正面3間、側面5間の切妻造り、平入り、照屋根流れ造りの社です。拜殿上部に元石川県知事田谷充実氏揮毫の社額が掲げてあります。境内には百日紅や椎の木の古木があり、遊具なども設置され、区民の憩いの場になっています。祭神は誉田別尊・氣長足姫尊・比咩大神です。

普念寺旧跡地



普念寺は、「津幡町史」に「天文7年(1536)、天台僧道珍が中須加村で開創したと伝え、この道珍が蓮如に帰依し、改宗して慶了と改名した」とあります。ここに記す開創時期と蓮如の活躍した時期は、文明年間であり、年代に隔たりがあります。寛永19年(1642)、当寺へ東本願寺宣如法主より蓮如上人真影が下附されていますから、寺号の下附はそれ以前になります。創建はそれより遡ることは明らかです。延宝2年(1674)、東方に位置する北国街道沿いの横浜村へ移転し、現在に至っています。

洞庭善兵衛碑



善兵衛は善教翁の長男で、号は如恒。碑面の「一人も御徳に風光る椰 句佛」は東本願寺第23世法主・大谷光演師の句です。背面に4行56文字を刻み、当碑建立の由来を簡潔に認めています。善兵衛は井上村初代村長に就任し、県議員などの要職を歴任しています。その間川尻新道改修工事など地域に貢献した業績は枚挙にいとまがありません。その功績を讃え、大正13年に建立されました。

真田吉左衛門碑



吉左衛門は蓮成翁の子息で明治7年に生まれました。俳句の宗匠で、号は蕉翠。碑面に「真田蕉翠翁為頌徳顕彰」、右側面に「それぞれに草の影おく月夜かな 蕉翠」と刻まれています。氏は明治40年～大正4年まで郡会議員を務め、郡会議長の重責も果たしています。各要職に就き、数多くの業績を残していますが、とりわけ川尻地内の耕地整理事業や川尻水門建設工事は功績の著しいものです。

真田蓮成居士碑



蓮成翁は天保10年(1839)、川尻村に生まれました。10歳頃より津幡村清水の神職加藤氏に書を習い、洞庭善教氏より書経を学びました。15歳頃より子どもたちに書き方を教え、みずからも金沢へ出かけて前田家の書家橋氏のもとで書の修練に励みました。平生から慈悲心が篤く、その善行は村民から大いに敬慕されたといわれます。傍らに建つ「追憶碑」は生前、蓮成翁と親しかった文士たちが翁を偲び詠んだ歌です。

洞庭善教居士碑



善教翁は文政6年(1823)、川尻村の善兵衛の長男として生まれました。幼少のころから向学心が強く、青年になると金沢へかけて広岡村の五香屋嘉兵衛氏に師事し、漢学や絵画を学び、多くの文人たちと交流しています。後年、村に寺子屋を開き、子どもたちの教育に尽力しました。画家としても名声が高く、号は西破、医師神社拜殿に掲げられている「源平合戦の図」は翁の代表作です。

川尻区のパンモチ石



「パンモチ」は江戸時代から昭和の初め頃まで全国各地の集落で盛んに行われていました。「河北郡誌」によると、当時の川尻集落では相撲をはじめ、パンモチや囲碁・将棋・尺八・横笛などが娯楽としてあげられています。戦前までは五斗俵(75kg)を担ぐと一人前の男に認められ、大人の仲間入りができたといわれます。パンモチ石は医師神社の鳥居両側に6個存在しますが、それらはイバラ石やコロコロ石、カメ石などと呼ばれており、重さは93kg～158kgをはかります。

洞庭朝休碑



朝休翁は天保12年(1841)、川尻村に生まれました。名前を休、号を琴理斎朝休と称しました。子供の頃から花をたいへん好み、明治9年(1876)、金沢の巢鴨庸軒派宗匠琴斎の門弟に入り、師のもとで華道修行に励みました。同25年から加賀国の宗匠となり、大勢の門弟を教導し、庸軒派の発展に尽力しました。碑は門弟たちにより建てられたものです。撰文は漢学者の五香屋嘉兵衛、書丹は細野燕台、石工は近松二平。

七地藏尊



堂内に7体の地藏菩薩像が安置されていますが、右端の1体は明治末、納口宇八郎氏が津幡川下流で水死体を発見し、その霊を供養するために造立したものです。左側に並ぶ6体の地藏菩薩像は、当地出身の宮川作次郎氏(大阪市)が大正5年に亡くなった子どもの供養に造立したものです。当地蔵尊は大正8年、川尻区の大舞場敷地に小堂を建て安置されましたが、平成5年、「井上の荘」団地造成に伴い、川尻区共同墓地西側の現在地に移転しました。

共同浴場跡



戦後の昭和21年から平成の初め頃まで川尻地内に共同浴場が6カ所存在しました。かつて、川尻集落には飲料水がなく、明治の初め頃に中橋地内より飲料水を通水し、イケ(井戸)仲間を組織しました。イケ仲間は6組織ありましたが、そのイケ仲間が共同浴場をつくる母体になっています。共同浴場は、衛生面はもとよりコミュニケーションの場として、また地域の連帯感や活性化、そして憩いなどにも大きな役割を果たしてきました。

ヨーバ跡



川尻のテント舟は江戸時代～戦後の昭和21年まで河北潟や津幡川を往来し、物資を輸送していました。手取川河口の本吉湊(旧美川町)から砂利や菜種、さらに大野や大根布、西荒屋などから浜砂やメカなどを積み、河北潟の水上交通によって川尻まで運びました。ヨーバ跡は物資集散の中継地になっていたところで、ここで舟荷の積み替えを行い、上流の津幡や竹橋まで輸送していました。大正時代はあたかも小さな港のような活況ぶりであったといわれます。

中橋区久左衛門屋敷伝承地



久左衛門は17世紀後半、中橋村に生まれました。算数にすぐれ、測量が巧みなことから、藩より十村役に任命されました。当時の河北潟東縁部は荒蕪地で、水利が悪く農作物が実らないことがしばしばありました。久左衛門はこれを憂い、宝永～正徳年間(1704～15)に河原市用水(森下川～津幡川)の開削工事を行いました。この他にも津幡池や加茂池、御門池を築き、そして羽咋郡内では菅原堤など4堤を造成し、藩の農政事業に多大な功績を残しました。宝達志水町の菅原神社では久左衛門が祭神として祀られ、大正14年には町内の浅田地内に顕彰碑が建てられました。

中橋区のパンモチ石



中橋区正八幡神社境内の右奥にパンモチ石が3個存在します。写真右側より2つ目と4つ目と5つ目がそれぞれであり、それぞれの重さは79kg、81kg、88kgをはかります。このパンモチ石は集落内に置かれていたものですが、かつて若衆が体の鍛錬や、力自慢を競いあつたりしたもので、男性社会の社交場の一つとして重要な役割を担っていた歴史民俗資料です。

中橋遺跡



中橋遺跡は、平安時代中頃～室町時代にかけて営まれた遺跡です。発掘調査により掘立て柱建物と井戸が検出され、遺物では10世紀代の土器をはじめ、中世の珠洲焼や中国製の青磁・天目茶碗などが出土しました。井戸が多いことは飲料水が豊富で、生活に適した土地であったことを示しています。居住者は河北潟や津幡川の水運に深く関わり、かつ河北潟東縁部を開拓した開発領主が想定されます。

五反田石標



石標は大正13年、川尻新道から五反田集落へ通じる道を開設した記念に建てられたものです。当集落の人たちはこの道ができるまでは東隣の中須加地内を通り、津幡町へかけていました。正面の碑文は「遠きと交わり、近きと親しむ」と刻まれています。当道路の開設を契機として中橋や川尻集落と交流を深め、中須加集落とは従来通り親しくしていこうとの意味がこめられています。

五反田区のパンモチ石



パンモチ石は江戸時代～昭和の初め頃まで全国各地の集落で盛んに行われていた力くらべに用いられた石です。戦前までは五斗俵(75kg)を担ぐと一人前の男に認められ、大人の仲間入りができたといわれます。当境内にある2個のパンモチ石は、かつて若衆が力くらべや鍛錬に用いたもので、重さは85kg(青石)、112kg(灰青石)を計ります。若衆が体力づくりに流した汗が染みこんだパンモチ石は、郷土の娯楽文化を物語る大切な歴史民俗資料です。

井上の荘の団地名



平成6年、石川県住宅供給公社により「井上の荘」住宅団地造成が着工されました。その年の9月25日、津幡町森林公園において徳仁皇太子殿下・雅子妃殿下のご臨席のもと「第18回全国育樹祭」が開催されています。式典後、皇太子ご夫妻が町役場にてご休憩なされたおりに妃殿下より、矢田剛町長に中世の「井上の荘」に関するお尋ねがありました。当時、当団地名が決まっておらず、同席していた谷本知事は妃殿下よりお言葉のあった「井上の荘」がふさわしいと考え、団地名にしたものです。

川尻ちよんがり音頭と踊り



津幡町無形文化財指定 昭和38年